

en の遊離と反対格仮説

井口 容子

0. 従来自動詞とされてきた動詞を、反対格 (*inaccusatif*; ex. arriver, venir) / 反能格 (*inergatif*; ex. téléphoner, marcher) に区別する考え方が、生成文法や関係文法の研究者によってこのところよく取り上げられる。

生成文法では、反対格動詞は「目的語に対して格を与えず、主語に対しては θ 役割を与えない」という特性をもつ動詞として位置付けられる。これに従うと (1) は (2) のような D 構造をもつことになる。

(1) Un garçon est arrivé.

(2) [NP e] est arrivé un garçon.

un garçon は D 構造では目的語の位置を占めており、主語は空名詞句である。この構造に *move- α* と呼ばれる移動規則が適用されて、un garçon が主語の位置に移動したものが (1) である。また *move- α* が適用されるかわりに、主語位置に意味をもたない非人称の *il* が挿入されたものが (3) である。

(3) Il est arrivé un garçon.

本稿においては反対格動詞の代表的な特性のひとつとされる、主語からの *en* の遊離を許すという現象に注目し、意味的な面から問題の解決を試みる。

1. 名詞の補語として機能する *en* のうち、*en* が直接目的語と関係づけて解釈される場合は、ほとんど問題なく許容される (ex. J'en connais l'auteur.). これに対して *en* が主語にかかる場合にはきびしい制約がある。従来主語からの *en* の遊離が許されるとされてきた構文は (4) のように分類することができる。

(4) a. 反対格動詞

La confirmation en (=de cette nouvelle) est arrivée à cinq heures.
(大木 1990b)

b. 受動文

La porte en (=de la maison) est fermée.

c. 中動的代名動詞 (*se-moyen*)

Ce veston, la doublure s'en lave en dix minutes. (BOUCHARD 1988)

d. 中立的代名動詞 (*se-neutre*)

Le bruit s'en est vite répandu. (MORIN 1981)

e. phrase prédicative

La préface en (=de ce livre) est trop flatteuse. (COUQUAUX 1981)

これに対して主語からの en の遊離を許さない構文は (5) のようなものである。

(5) a. 反能格動詞

*L'auteur en (=de ce livre) a téléphoné.

b. 他動詞

*L'auteur en (=de ce livre) a mangé une pomme.

c. 再帰的・相互的代名動詞

*Quand l'auteur (de LSLT) s'en regarde dans la glace le matin, à quoi pense-t-il? (BOUCHARD 1988)

生成文法では COUQUAUX (1981), BURZIO (1986) らがこの現象を説明しているが、それは次のようなものである。(4) にあげた構文はすべて、D 構造においては主語の位置が空であり、表層の主語は目的語の位置に存する、という共通の特徴をもっている。これに対して (5) の三つの構文の主語は、いずれも D 構造から主語位置に生成されるものである。このことから「en は D 構造において動詞の右側に位置する名詞句からのみ遊離できる」という仮説が導きだされることになる。

2. 主語からの en の遊離の可能性と、助動詞としての être の選択の関連性がしばしば指摘される。たしかに arriver, venir 等の典型的な反対格動詞や代名動詞のことを考えれば、ある種の妥当性が感じられる。しかしながら MORIN (1981) が指摘するように、(6) にみられるような動詞は助動詞としては avoir を選択しながら、主語からの en の遊離を許容する。

(6) a. Ce n'est pas l'envie qui m'en (=de le faire) manque.

b. L'idée m'en (=de le revoir) plaît assez.

c. L'idée ne m'en (=de le revoir) sourit guère.

これらの動詞は POSTAL (1971) がいう意味での心理動詞であり、経験者を与格としてとるものである(以下「与格型心理動詞」)。与格型心理動詞はこの他にもいくつかの特有の現象をみせることから「心理主語移動 Psych-Movement」的な規則を生成文法の現在の理論にあった形で導入しようという動きが最近みられる (cf. BOUCHARD (1988), BELLETTI & RIZZI (1986), RIZZI & BELLETTI (1988))。これによると与格型心理動詞の表層の主語は、反対格動詞と同様、深層では目的語であったものとされ、en の遊離も可能となる¹⁾。

ただこの構造に依拠した説明は、次のような問題を含んでいる。これらの動詞がこのような基底の構造をもつものであれば、非人称構文を許容することが予想される。たしかに manquer に関しては非人称構文が可能である。

(7) Il me manque de l'argent.

だが *plaire* はどうだろうか。LEGENDRE (1989) は (8) の文を「可」とする。

(8) a. Il lui plairait sûrement beaucoup de pays.

b. Il plairait beaucoup de femmes à Pierre.

しかしながら筆者がインフォーマントに尋ねたところ、これらはいずれも「不可」であった。

主語からの *en* の遊離に関しては次のような問題もある。

(9) a. La confirmation *en* (=de cette nouvelle) est arrivée à cinq heures.

((++)bh (+)adeg (0)cf (-) (--))

b. L'auteur *en* (=de ce livre) est arrivé à cinq heures.

((++) (+) (0)e (-)d (--)abcfgh)

(以上、大木 1990b)

同じ反対格動詞の *arriver* を用いた文であるのに、(9b) に対する評価はかなり低いことを大木 (1990b) は指摘している。これは構造に依拠した従来の分析では説明できない。

3. 本稿においては *en* の遊離の問題を、反対格仮説の直観を生かしながらも「構造」によって説明するのではなく、「意味」の面から説明してみたいと思う。意味・機能の面から *en* の遊離の問題を扱った研究に、大野 (1983)、大木 (1990a, 1990b, 1991) がある。本稿の関心の中心はあくまで動詞の語彙的特性にあり、動詞がその項に与える意味役割、という観点から意味の問題に言及する。*en* の分布を考えた場合、動詞の種別という要因は切りはなせないものと思われるからである。この点において上記の研究と我々の立場は異なる。

我々が提案するのは次のような制約である。

(10) *en* は行為者 (acteur) もしくは経験者 (expérienceur) の役割を担う名詞句からは遊離することができない。

反対格構文は深層においては (2) のような主語位置が空である構造をしているとされる。これは意味的には「主語が行為者ではない」ということを示唆するものであるといえる。「行為者」は主語の位置に付与されるべき代表的な役割だからである。受動文や中動・中立的代名動詞など、主語からの *en* の遊離を許すとされる構文はみな、深層では空主語をもつとされるものであり、「主語が行為者ではない」という条件を満たす。ただこのような形で定式化するには、「行為者」、「経験者」という役割のもつステイタスをはっきりさせておかなければならない。

そこでまず「行為者」という役割について考えてみたい。JACKENDOFF (1987, 1990) は文の概念構造は階層をなすものであり、従来の「主題関係の層 (thematic tier)」に加えて「行為の層 (action tier)」が存在する、と主張している。「主題関

り、その意味において「知覚対象」、「経験者」とみなすことができる。

これに対して (9b) の *l'auteur* はむしろ「行為者」とみなすべきである²⁾。

(18) *L'auteur de ce livre est arrivé à cinq heures.*

thème

acteur

つまり *arriver* のような空間的移動を表わす反対格動詞には、*arriver*₁ / *arriver*₂ として区別すべき、二つのタイプがある、と考えるのである。これは生成文法でいう「二重の下位範疇化 (double sous-catégorisation)」の現象である、ということが出来る。いずれも「主題関係の層」における意味関係は同じである。違うのは「行為の層」における意味関係で、*arriver*₁ (ex. (17)) は (11b) の EXP という関数で示されるものであり、*arriver*₂ (ex. (18)) は (11a) の ACT という関数で示されるものなのである。前者は *plaire* のような与格型心理動詞に近いものであり、後者はむしろ、*marcher* のような反能格動詞に近いものである。

この「二重の下位範疇化」は、次の (19) にみられるような与格補語の許容性の相違も説明することができる。

(19) a. *Une bonne idée lui est venue.*

b. **Des enfants lui sont venus.*

(19a) は *venir*₁ の例文というべきのものであり、EXP 型の関数で表わされるものである。(19b) は、ACT 型の関数で表わされる *venir*₂ の例文である。(19a) の *lui* は、「経験者」の役割を担うものとして許容されるのである。

(9) のコントラストにもどろう。(9b) の主語は「行為者」の役割を担うものであるため制約 (10) により、*en* の遊離は不可能となる。これに対して (9a) の主語は関数 EXP の第二項の知覚対象であり、「行為者」でも「経験者」でもない。このため *en* の遊離は許容される。

6. 制約 (10) にはさらに次のような利点がある。BELLETTI & RIZZI (1986) はイタリア語において、経験者を対格で表わす心理動詞(以下「対格型心理動詞」)の目的語からフランス語の *en* にあたる *ne* を遊離した文は、許容度が低いことを指摘している。フランス語についてはどうだろうかとのインフォーマントによる調査を行ったところ、(20) のような興味深い結果が得られた。

(20) a. **La nouvelle en (=de la compagnie) a effrayé le président.*

b. **Sa conduite en (=de la compagnie) a dégoûté le président.*

c. **L'article du Monde en (=de la compagnie) a intéressé le président.*

d. **L'article du Monde en (=de la compagnie) a étonné le président.*

いずれの文に対しても、インフォーマントははっきりと「不可」の評価を与えている。目的語からの *en* の遊離は比較的自由に行なわれるものとされている。大木

(1991) も直接目的語名詞句を限定する de NP の en 化については、(NP_i de NP_j) において「NP_i が NP_j に対して、より内在的 (intrinsèque) であればあるほど、容易に en 化することができる」という制約だけで十分である、としている³⁾。しかしながら (20) における目的語からは en を遊離することはできないのである。一方、制約 (10) はこの現象もうまく説明することができる。対格型心理動詞の目的語は「経験者」の役割を担うものだからである。

7. ただ制約 (10) には次のような問題がある。主語からの en の遊離は与格型心理動詞においては可能であるが、対格型心理動詞においては不可能であることが BOUCHARD (1988) 等によって指摘されている。確かに (21) の文をインフォーマントは「不可」とする。

(21) a. **La préface m'en (=de ce livre) intéresse beaucoup.*

b. **La découverte en (=de ce manuscrit) a étonné tout le monde.*

これらの文の主語名詞句は「知覚対象」の役割を担うものであり、「行為者」でも「経験者」でもないのだから en の遊離が許されそうなものであるが、実際には不可能である。

この現象は、対格型心理動詞の主語を与格型心理動詞のそれから区別する他の要因がはたらいっていることを示唆するものであり、en の遊離は制約 (10) に加えてこの要因が関与するものと思われる。今後の研究課題として興味深いところである。

(広島大学)

[注]

本稿は日本フランス語学会第 107 回例会における発表を基に、その後の考察を加えてまとめたものである。例会当日、有益な御意見、御指摘を下された方々、草稿の段階で貴重な御批評を下された編集委員の方々、さらに快く調査に応じて下さったインフォーマントの方々に厚く御礼申し上げる。

1) 助動詞の選択に関しては次の問題もある。受動文は「受動態」としての助動詞は確かに être であるが、複合時称の助動詞としては avoir をとる。したがって反対格動詞や代名動詞の場合とは事情が違ふ。BURZIO (1986) はこれらの事実を前に、フランス語における助動詞の選択はイタリア語とは違ったシステムによって説明されねばならないと指摘している。(BURZIO によるとイタリア語においては受動態の複合時称の助動詞は essere である。)

フランス語においては、助動詞 être の

選択と主語からの en の遊離の現象は、切り離して考えるべきものであると思われる。

2) このような文における空間型反対格動詞の主語が「行為者」の役割を担うということは、次のように主語が「行為者」であることを要求する副詞句と共に起ることによっても確認される。

i) *Pierre est parti à regret.*

なお i) のような現象は JACKENDOFF (1972), ZUBIZARETTA (1982), KEYSER & ROEFER (1984) 等によって「二次的動作主 (secondary agent)」と呼ばれてきたものである。

3) 大木 (1991) は主語にかかる en と目的語にかかる en を区別し、前者は意味構造的には二重主題構造になっているものと考え、この制約に加えて制約 2 がはたらくものとしている (p. 36)。しかしながら (20) のような例を考えると、この二つは同一の制約で説明すべきものであると思われる。

[参考文献]

- BELLETTI, A. & RIZZI, L. (1986): «Psych-verbs and Th-theory», *Lexicon project working papers* 13, Cambridge, Mass., Center for Cognitive Science MIT.
- BOUCHARD, D. (1988): «En-chain», *Advances in Romance linguistics*, Foris, Dordrecht.
- BURZIO, L. (1986): *Italian syntax*, Reidel, Dordrecht.
- COUQUAUX, D. (1981): «French predication and linguistic theory», in MAY, R. & KOSTER, J. (éds), *Levels of syntactic representation*, Foris, Dordrecht.
- JACKENDOFF, R. (1972): *Semantic interpretation in generative grammar*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
- JACKENDOFF, R. (1987): «The status of thematic relations in linguistic theory.», *Linguistic inquiry*, 18-3.
- JACKENDOFF, R. (1990): *Semantic structures*, The MIT Press, Cambridge, Mass.
- KEYSER, S. J. & ROEPER, T. (1984): «On the middle and ergative constructions in English», *Linguistic inquiry*, 15-3.
- LEGENDRE, G. (1989): «Inversion with certain French experiencer verbs», *Language*, 65.
- MORIN, Y. -C. (1981): «Some myths about pronominal clitics in French», *Linguistic analysis* 8-2.
- 大木 充(1990a): 「名詞補語 de NP の en 化と他動性」, 『フランス文化の中心と周縁』, 大阪外国語大学フランス研究会.
- 大木 充(1990b): 「名詞補語 de NP の en 化と生成文法」, 『大阪外国語大学論集』第3号.
- 大木 充(1991): 「名詞補語 de NP の en 化: その機能と制約」, 『フランス語学研究』第25号, 日本フランス語学会.
- 大野晃彦(1983): 「名詞の補語 de NP の EN 化に関する談話法的制約について」, 『フランス語学研究』第17号, 日本フランス語学研究会.
- POSTAL, P. M. (1971): *Cross-over phenomena*, Holt, Rinehart and Winston, New York.
- RIZZI, L. & BELLETTI, A. (1988): «Remarques sur les verbes psychologiques, la θ -théorie et le principe de liage» *Lexique* 7.
- ZUBIZARETTA, M. L. (1982): *On the relationship of the lexicon to syntax*, MIT Ph.D. Dissertation.